



episode 13 世界で唯一の、特別な本

投稿者 藤崎 敬子 さま(宮崎県)



『もりのえほん』
安野光雅 作
福音館書店 1981年

2020年12月末、私と夫に県外に住む娘から誕生日プレゼントが届き、開けてみると2冊の絵本。
「えっ、なんで絵本!?!」。

夫には、安野光雅さんの『もりのえほん』。私には、『ルピナスさん』という絵本。

「お父さん、お母さん、孫たちと一緒に読んで楽しんでね」と、娘からのメッセージ付き。

25歳の娘が、60過ぎた親に絵本を贈るなんて聞いたこともなく、意外過ぎてしばらくそのままでした。

そもそも絵本は、親が子供のために選んで与えるものと思い込んでいた私。

私も、沢山の絵本を3人の子供に与えてきました。

いや、待てよ。だとしたら逆に、娘が私達に贈ったこの本は、世界中で唯一の特別な本なのではないだろうか。
夫に話すと、「そうだ、大切な本だ。」と、慌てて探してきました。

その日の夜、私と夫2人で、『もりのえほん』を開きました。

文字はなく、ただただ深い森が描かれていて、その中に隠れている動物を探すのです。

「あっ、ライオンがいる」「そうだね」「あなた、見つけるの上手ね」。そこには、夫の和やかで優しい笑顔。

結婚36年、こんなに幸せな時間があっただろうか。夫婦で絵本を読むなんて、人生初めての体験をしました。

そして、奇跡のようなことが起こります。娘の本棚から、『もりのえほん』が出てきたのです。

私が20年以上前に、娘のために買った本。さすがに少し色あせていました。

驚きと懐かしさ、そしてなぜか娘への愛おしさがぐっと込み上げてきて、私は思わず絵本を抱きしめました。

『もりのえほん』は20年以上もの間、私と夫と娘を繋ぎ続けてくれたのではないだろうか。

遠く離れた娘は、「離れていてもずっと繋がっているよ」と、優しく私に語りかけてくれた気がしました。

あの日の夫のように…。

絵本の不思議で素晴らしい力に出会い、今では絵本を贈ってくれた娘に心から感謝しています。

娘には、このエピソードを添えて、再度『もりのえほん』を贈りたいと思います。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2021」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



年齢も国境も越える、文字のない絵本

「文字のない絵本」、「探し絵本」、「植物絵本」、「動物絵本」、「アート絵本」…『もりのえほん』は、これらどのジャンルにも分類される、遊び心と芸術性の高い一冊です。表紙を開いてページをめくっていると、文字は一切なく、延々と森の木々が描かれているので、画集のようでもあります。

ただ、その木々をよくよく見ていると、木の幹や木の葉の茂み、草むらに隠れている動物が浮かび上がるのです。これが、探し絵の楽しみです。この一冊があれば、きょうだいで、夫婦2人で、あるいは家族みんなで、はたまた友だちといっしょに、際限なく遊べる逸材なのです。文字がないから、年齢も国境も越えて手渡せる絵本です。

文字のない絵本でデビューした絵本作家

この絵本が発行されたのは1977年、初出は福音館書店の月刊雑誌「こどものとも」259号でした。後に単行本として刊行され、令和時代の2024年にも読み継がれているロングセラーは、モノトーンで文字のないシンプルな絵本です。これがアート絵本の所以です。

作者は、2020年12月24日に94歳で逝去された安野光雅氏です。安野氏が文字を使わない絵本制作にチャレンジしたのは、デビュー作にはじまります。1968年に『ふしぎなえ』（福音館書店）で絵本作家デビューを果たすと、日本における文字のない絵本の中心人物となりました。今では、日本でも「文字のない絵本」のジャンルは確立していますが、そのきっかけとなったのは安野光雅氏の成功にあると、絵本研究者の石井光恵氏は述べています。

安野氏が、遊び心にあふれた画家であることは有名です。『もりのえほん』を制作しようと考えたのは、「普通の絵を描いていたんじゃ誰も驚いてくれないから、ちょっと騙してやろうと本気になって描いた」と明かしているくらいです。

しかしながら、安野作品を難解と評する読者もいます。その理由として、「文字がない」ことがあげられるでしょう。そして、作者の「騙してやろう」という遊び心が、読者には「わかりにくい」とされるのかもしれませんが。

『もりのえほん』を鑑賞する

では、『もりのえほん』を鑑賞してみましょう。森全体を俯瞰した景色にはじまり、次第に森の中に分け入っていく動線は、読者が森に引き込まれるかのようです。

線の流れも見どころです。太い線と細い線を使い分けたいうでの直線と曲線には躍動感があります。モノトーンなのに色遣いにも目を引き、濃淡のバランスは美しさを際立たせています。極めつけは、細かい描き込みです。樹皮や小枝、葉っぱの一枚一枚の質感には繊細さと力強さがあり、隅々を観察しても飽きることがありません。これが画集の要素でしょう。

このような美術鑑賞をしていると、おのずと動物たちがみえてくるのです。探し絵でありながら、答えが記されていない本作について安野氏は、「自分で見つける所に喜びがある本なのに、それを教えてしまつては、子どもの発見の喜びをうばうことになる」と述べています。遊び心は、子どもたちが発見の喜びを体験する着地点まで考えられているのです。

目に見えなくても、そこにいるよ

「目には見えなくても、そこにいるよ」。『もりのえほん』には、こんなメッセージがあると考察します。本作の大きなテーマは、「いのち」といえるでしょう。人間の目には見えないところにも、いのちは宿っていることが感じられるのです。

探しっこをしながら、美術鑑賞をしながら、いのちを感じてください。いのちの尊さを感じてください。

文献

- 1) 安野光雅&桑村 綾 対談：仕事とは尊い遊び、致知、509, pp.10-18, 2017.
- 2) 山本美希：安野光雅の文字のない絵本, ユリイカ 53(7), pp.353-360, 2021.